様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 １４ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2017
課題番号：２５３７００４０

研究課題名（和文）明清教派系宝巻盛衰の研究―武神と聖母神信仰をめぐって―

研究課題名（英文）A Study of the Vicissitudes of Sectarian Precious Volumes during the Ming-Qing Period: On the Cults of Martial Gods and the Goddess Sacred Mother

研究代表者
磯部　彰（Isobe, Akira）

東北大学・東北アジア研究センター・名誉教授

研究者番号：９０１４３８４１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究課題では、研究期間全体を通して、聖母女神系、武神系及び文神系という宝巻区分のもとに、現地調査と伝存する教派系宝巻及び史料に基づき、西大乗教の宝巻を中心に、教派系宝巻の内容と特徴及びその宗教的背景を探った。
その過程で、羅祖の無為教と深い関係にある山東省や大運河・黄河流域にあった関帝・泰山娘娘・孟姜女・二郎神等の故事が、西大乗教の教義に取り込まれて宝巻となり、北京で貴顕の喜捨の下で印刷されたことを導き出した。そして、明末清初には、西大乗教とは別の無為教の流れを汲む教団の布教組織が江南・華南社会に生まれ、それと呼応するように、教派系宝巻も北方からその地に浸透したことを指摘した。

研究成果の概要（英文）：Throughout the research period, basing myself on the division of “precious volumes” (baojuan) into those associated with the goddess Sacred Mother (Shengmu), with gods of war, and with gods of literature, I have been investigating the contents, characteristics, and religious background of sectarian precious volumes, chiefly those of Xi dasheng jiao .
In the course of this research, I deduced that tales about Guandi ,Taishan Niangniang , Meng Jiang, Erlangshen ,and so on, which were closely related to Wuwei jiao founded by Luozu and were circulating in Shandong province, along the Grand Canal, and in the Yellow River basin, were incorporated into the doctrines of Xi dasheng jiao, turned into precious volumes, and printed in Beijing with donations from distinguished persons.

研究分野：中国文学・東アジア文化史

キーワード：西大乗教　泰山娘娘　順天保明寺　教派系宝巻　無為教　女性信者　観音菩薩　関帝

１．研究開始当初の背景

明代中期、羅祖による新宗教無為教は、社会の混乱と疲弊、外寇の不安などから、華北の大衆の帰依により急速に拡大していった。郷村社会には、もともと、伝統的に白蓮教に代表される民間信仰が根付き、思想宗教界は三教合一の動きが高まる時代を迎えていたことから、無為教及びそれから派生した西大乗教や黄天道などの地域宗教は、当時の風潮を如実に反映した形で形成されていった。

羅祖の五部六冊と略称される経典五種は、教団を維持する経典であるとともに、民間に新たな地盤を置く宗教の要となった。羅祖五部六冊は、その内容から羅祖の作成と言われる。経典には、教義をわかりやすく伝えるため、民間信仰や故事説話が例証の形で摂取され、以後の地域宗教や同類の宝巻作成の手本となった。

羅祖の五部六冊宝巻に倣って作られた教派系宝巻は、教義表現が往々にして練り上げられていない上に、民間の故事や教団が新たに造出した神格が信仰の内容に混在して説かれるため、信仰の実態、或は、教派系宝巻で説かれる内容に理解しがたい面が多々あった。そのような状況の中、羅祖と五部六冊、そして西大乗教、教派系宝巻などについて、近年、澤田瑞穂氏、車錫倫氏、浅井紀氏ら先学の研究によって、かなり詳しく明らかにされるようになった。

教派系宝巻の展開を見ると、明代後期から清代にかけて地域社会に根差して浸透し、現在なお中国人の日常生活に深く関与していると言える。筆者は、宝巻そのものに、それぞれの時代の人々の精神生活、宗教観や倫理規範、願望など、様々な精神的内面が反映されている点に着目し、郷村社会の地域信仰を通して中国社会の構造の一端を知ることができると考えた。そして、伝存する宝巻こそが、最も根本的な資料であることに気づくに至った。本研究の準備段階の検討で、羅教系教派系宝巻には、泰山信仰や娘娘信仰、大運河ルートに存在した遭運業者のギルド社会、民間故事などの反映などがみられ、清代になると、江南の書肆、善堂寺廟で宝巻が出版され、農村に根付いていくことを突き止めていた。ただ、清代では明代の教派系宝巻というよりも、物語性を中心とする故事系宝巻が中心である。表面的には、宝巻の展開は華北と江南などに分散したかの印象を受けるが、無為教の分派の動きと江南地方の故事系宝巻の誕生とは何らかの影響関係にあったのではないかとの見解も抱くようになった。

しかし、これまでの研究は、明代の宝巻研究、現代社会の故事系宝巻上演の紹介など断代的な視点が中心で、中国社会全体から見た通時的な宝巻の盛衰についての研究は乏しかった。それゆえ、近世中国社会全体という視点から、教派系宝巻を地域精神文化として捉え、通時的に郷村社会との関係を考察することによって、中国社会をより正確に把握することができるのではないかとの考えを懐き、本研究の設定に至った。

２．研究の目的

これまで、宝巻と言えば、清末民国時代の限られたテキストしか見られなかったことから、教派系宝巻の研究はきわめて不十分な状況にあった。今日、明清の版本、鈔本、あるいは影印本を通して、かなりの古教派系宝巻を目にできる。そこには清末の再刊本ではうかがい知ることのできない要素を認めることが可能となり、宝巻そのものから信仰の内容、教団の性格など多くの情報を入手できるようになった。

本研究では、教派系宝巻の性格とその盛衰、及び変貌等について、民間故事を取り込んだ主要な古宝巻を中心に焦点をあて、明代中期から清代前期の民間宗教の教義及び教派系宝巻の内容と特徴を明らかにする。

具体的には、羅教の確立からその拡大を見

せ始める明末から清前期を中心に、河北・山東省や黄河流域に関係が深い関帝・泰山娘娘・孟姜女・二郎神の故事を教義に取り込んだ教派系宝巻と河北・山東省などの地域社会との相互関係を考え、教義と民間伝承を内容的に分別しつつ、教派系宝巻の構造と、教義確立を助けた当時の民間信仰や文芸故事の特色を摘出し、清代に隆盛を迎えた故事系宝巻へ変質する過程を明らかにする。また、教派系宝巻の出版をめぐって、その出版時期と出版地が、萬暦及び康熙に集中し、しかも多くは北京で出版されているため、西・東大乗教や黄天道などの展開との影響関係についても検討する。以上の点を念頭に、研究期間全体で重点的に解明する項目は、以下の諸点である。

(1)教派系宝巻個々の特徴

(2)明末教派系宝巻の内容とその地域性

(3)教派系宝巻の支援者、或は、社会的風潮、生成環境との関係

(4)無為教・西大乗教の流れと清朝末期の浙江・福建・江西方面での故事系宝巻の流行との関係

(5)明代後期、建陽の書林は、何故に教派系宝巻の出版をしなかったのか。この背景には、何があったのか、という点。

３．研究の方法

明末清初の各教派系宝巻原典と影印版を併用してその内容分析して要約し、関連する宗教史料分析を加え、教団や宝巻の特色を導き出す。他方、宝巻の展開を文化史や文学的立場から捉えるために、宝巻などの上演や史料に関するフィールド調査も行ない、実証的研究を研究期間全体で進める。

研究初年度、課題の方向性を定める前提として、明清時代の宝巻をめぐる研究史の総括をする。次いで、明代の宝巻と教派の特徴や区分から、研究全体を次の３段階に分けて順次進める。

（１）武神系宝巻の内容とその特徴の研究

教派系宝巻に見られる関帝・二郎神を主とした男性系武神を主人公とした宝巻の分析を行ない、当時の民間物語の諸相との関連を探る。また、明朝嘉靖時代から清朝前期の武神への王朝の関与についても分析を加える。

主として、明代古宝巻の構造分析、及び護法武神としての関帝及び二郎神の民間信仰の実状、彼らをめぐる文芸 ・民間故事との比較研究、護法神信仰の実態と民間宗教における教義作成との関連についての研究を実施する。

（２）女神系宝巻の内容と物語の特徴の研究

山東省と深い関係を持つ誕生神泰山娘娘、山東方面の長城伝説をめぐる孟姜女故事・作品と孟姜女宝巻との関係、女性神観音聖母、斗母などをテーマとした教派系宝巻の教義との関連性と特徴分析、及び女性を教主と仰いだ西大乗教の女神系宝巻と教義との関係に焦点を当て、女性神を扱う教派系宝巻の分析を行なう。さらに、明朝及び清朝が、女神系教派系宝巻や教団とどのような対峙をしたかを念頭に置き、教派系宝巻全体の展開を検討する。

（３）明末教派系宝巻の生成環境をめぐる研究

明代教派系宝巻に摂取された民間信仰・故事の全体的特色と宗教における文芸の役割、河北・山東方面を中心とする地域と教派系宝巻の生成の関係及び羅教系教派の宗教活動を明らかにし、清中期以降、故事系宝巻を生み出した江浙地域と比較して、宝巻や宗教文化の地域性を探る。とりわけ、大運河と黄河の漕運にかかわる地域と教派系宝巻の広がりが密接であった点を中心に検討する。また、明代、教派系宝巻の出版が北京で行なわれ、建陽出版界ではその痕跡がない原因を探るとともに、宝巻の江南地方への伝播によるその変質と故事系宝巻の興隆した背景を明らかにして、研究報告書の作成を行なう。

４．研究成果

研究期間全体を通して、聖母女神系、武神系及び文神系を加えた宝巻区分のもとに、西大乗教の教派系宝巻を中心とした教派系宝巻の展開を分析し、現地調査と伝存する国内外の教派系宝巻や史料に基づき、その性格・内容及び宗教背景を探った。その結果、羅教と深い関係にある山東省や黄河流域に広まっていた泰山娘娘・孟姜女等の故事が西大乗教の教義に取り込まれ、北京で貴顕の喜捨の下で教義と民間伝承が混在する教派系宝巻が印刷された。その背後には、教義確立を助けた民間文芸故事が存在し、支持者は朝廷の太監以外、后妃などの多数の女性信者がいた。明末には、教派系宝巻は北方から江南華南社会にも浸透し、清代に故事系宝巻へ変質する過程を明らかにした。個別課題の解明については、以下の通りである。

(１)武神系宝巻の内容と特徴の解明

西大乗教は、土木の変により正統帝から「御妹」の扱いを得た呂氏に始まると言われ、北京の皇姑寺(保明寺)にゆかりを持つ。教義を示す経典は、関帝宝巻、二郎宝巻という関帝や二郎神を賛美する教派宝巻、或は、泰山娘娘宝巻、十王宝巻という泰山に祀られる泰山娘娘と東嶽大帝を主神とする宝巻などがある。

二郎神を扱った『清源妙道顕聖真君一了真人護国祐民忠孝二郎宝巻』（二郎宝巻）及び関羽を扱った『護国祐民伏魔宝巻』（関帝宝巻）は、いずれも武神を主人公とした西大乗教の教派宝巻であり、羅祖の無為教が信仰された山東省方面とも係わり合いを持つ。

関帝宝巻は、明末から清初にかけて、『三国志通俗演義』の影響下に、王朝や銭謙益ら士大夫中心の関帝信仰書と教派性を維持した伏魔宝巻への二極分化を辿る。やがて、後者は、清官憲によって邪教の経典と認識されて行くが、関帝信仰及び関帝廟の存在に支えられて湮滅されることはなく、明刻本の段階ですでに数種あった点を解明した。

二郎宝巻は、二郎神劈山救母故事に基づくものの、教義が中心の宝典で、決して故事系宝巻ではない。伏魔宝巻と同様に、故事性には乏しいが、民間伝承の反映がある。嘉靖年間のテキストには先印と後印の関係にあり、版木は一種であるものの、幾度か印刷された。

（２）女神系教派系宝巻の内容と特徴の解明

西大乗教の神格、とりわけ重視される神格は、女性神の比重が大きく、泰山娘娘や観音菩薩を主神とする女神体系を取り入れている。これは西大乗教の教祖が女性であったこと、その活動地域が北京の皇姑寺を拠点に華北にあり、泰山と黄河という信仰と人との移動に深く係わる場所が信仰体系に大きく影響し、地域性の強い民間宗教の実態を反映しているためではないかと思われる。女神系宝巻の『護国威霊西王母宝巻』は、浙江布政使夫人の喜捨で重刊された。西王母宝巻では、地蔵老母の管轄する地獄からの罪人救済を説く。清初の『大梵先天斗母円明宝巻』も女神系宝巻で、陰曹を司る斗母元君が、女性の出産やその生き方を説く。『泰山東嶽十王宝巻』は文神系宝巻であるが、女性の罪が出産にあること、護国保明寺の呂祖の功徳、衲子の地獄見学を説く。いずれも、地獄の紹介を通して、女性の罪状やその救済に力点が入れられ、西大乗教系の宝巻が女性を意識し、清朝前期に至ってもその流れにある教派系宝巻は途絶えることなく制作されて、教義も継承されていたことがわかる

伏魔宝巻、二郎宝巻、女神系教派系宝巻の『霊応泰山娘娘宝巻』などは、いずれも西大

乗教の経典として作られ、北京で印刷された。各宝巻では、くり返し朝廷への忠誠と外寇への功果などが織り込まれ、その成立には嘉靖時代の北京や山東方面の政治状況が反映されている。『銷釈孟姜忠烈貞節賢良宝巻』（孟姜宝巻）は、全体が孟姜女を主人公とした故事系宝巻の体裁をとり、西大乗教との関係は不明であるものの、長城伝説が嘉靖刊本『山海関志』に記録されていることから、山東という地域、無為教系教団との関係を持っていたと思われる。

教派系宝巻の根本的な特徴は、仏教経典のような論理的思惟に乏しく、説法を記す経文を羅列する中に、新たな宝巻の刊行を促す、もしくは、当該経典の出版事業を賛美する点に見られる。西大乗教などの地域的宗教は、宝巻分析の結果から見ると、教祖とその説法、そして経典、建築物(廟宇)の三種が存在する点を重視していて、教義そのものは、仏教や道教、その他の民間信仰、無為教で説かれる内容を出るものではないことがわかる。

（３）教派系宝巻の生成背景の解明

明代中期、河北省や山東省方面で教派を拡大した羅祖による無為教教団(羅教)は、五部六冊の教義経典を根本にし、地域性の強い信仰を全面に打ち出した。羅教の影響は、その後の華北地方での民間宗教にも継承され、黄天道などの流派を生んだ。大乗教もその一つで、東大乗教と西大乗教は教祖が異なるものの、宗派的相違というよりも地域による呼称の相違の可能性が窺われ、宝巻の内容から見る限り、各教団は一定の連繋性を持ちつつ、羅祖無為教の延長にあり、厳密な意味での思想信条の相違が少ない地域民間宗教教団であった。

明代、無為教の流れを汲む西大乗教は、朝廷の保護下に、保明寺を本拠地として信仰を広めていた。隆慶６年順天保明寺鐘は、萬暦帝生母慈聖皇太后李氏の命で作られ、寄進者には官僚夫人、住持ら僧尼、女性信者、司礼監太監・錦衣衛などの太監らの名が列挙される。萬暦４年「重脩皇姑寺碑記」には、司礼監掌印太監馮公が施財したと記す。この他、北京の大鐘寺に保存される天順５年の銅鐘など歴代の鐘銘から、朝廷の后妃・官僚夫人および宦官、女性信者が密接な関係のもとに保明寺西大乗教などの宗教活動を支えていたことを物語る。一方、教派系宝巻は、朝廷の后妃・官僚夫人および宦官の寄進によって刊行され、后妃・官僚夫人などの女性を対象としていた色彩が濃い。

明代教派系寶巻の出版が、北京の経鋪で行われ、皇妃や太監らが支援者であったことから、聞香教の反乱を除けば、ほぼ地域宗教として王朝から穏当な扱いがなされていた。この背景には、皇姑寺と呼ばれた保明寺が、嘉靖・萬暦・崇禎各皇帝の生母と密接な関係の中で保護されてきたことによる。『普度新聲救苦寶巻』は、西大乗教の教祖呂氏の伝記であるが、この女神系寶巻成立当時、西大乗教の拠点が保明寺にあったこと、布教が西北や華北で進んでいたことが知られる。とりわけ北京・山東方面での布教は、教派系寶巻にこの地方で流布していた民間伝承が教義に取り込まれる結果を招いたと思われる 。その反面、北京での喜捨による出版は、宗教教団の中での流通が主であったため、書籍経典の流布という観点からすると、南京や建陽の出版にみられる商品としての書籍とは異なった扱いのもとに流通していたと考えられる。

（４）教派系宝巻の南伝と展開の解明

萬暦以降、羅教は、大運河を縦軸に江南、そして、福建などの華南にも信仰組織を形成して拡大し、信者を獲得していった。『三祖行脚因由寶巻』に見える三祖の活動域が、教派系宝巻の南伝を示す。三祖とは、羅祖、殷祖、姚祖という３人の無為教宗教者で、羅、殷、

姚と転生したとする。殷祖は、嘉靖十九年に生まれ、台州、武義、金華、温州まで教勢を広めたが、萬暦年間に刑死した。姚祖は萬暦六年に慶元に生まれ、丙戌年順治３年に殺された。姚祖の家族は清になっても生き延び、康熙辛亥まで法灯を伝えた。清初の『三祖行脚因由宝巻』は、羅祖教の流れが江南や福建などに広がり、布教組織ができたことを伝える。『三祖行脚因由寶巻』は、羅教及び教派系宝巻が江南に定着しつつ、宗教教義を薄めて故事系宝巻に転化し、清中期以降、杭州や紹興などで行われた流れを示す資料であるとともに、無為教の流れを汲む老官斎教が地域に根差したこと、宝巻を取り入れた長編鼓詞『霊経大伝』が生み出されて、今日も江南社会に宗教文学として息づいている社会状況を解く鍵となることも明らかになった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）

①磯部彰：「建陽本「萬暦新歳」刊記考」（『東北アジア研究』第 22 号，2018 年 3 月,1－28 頁，査読有）

②磯部彰：「明代教派宝巻的文学故事与清代故事宝巻的関系－関于西大乗教的宝巻五部－」（『中国寶巻国際研討会論文集』、廣陵書社、2016 年 12 月，186－197 頁，査読有）

〔学会発表〕（計２件）

①磯部彰：「建陽本〈萬暦新歳〉刊記考」（「明代的書籍與文學」国際学術研討會，招待講演，寧波市（中国）天一閣博物館，2016 年 12 月 4 日）

②磯部彰：「狩野文庫の特徴について－明治の博物学者狩野亨吉の視点－」（東北大学東北アジア研究センター創設 20 周年記念国際シンポジウム，仙台国際センター（宮城県仙台市），2015 年 12 月 5 日）

〔図書〕（計２件）

①磯部彰（編著）

『広島市立中央図書館蔵浅野文庫漢籍図録』

東北大学東北アジア研究センター，2015 年 11 月，212 頁，

②磯部彰（編著）

『上山市立図書館蔵上山藩明新館文庫目録と研究』

東北大学東北アジア研究センター，2014 年 11 月，176 頁

６．研究組織

(1)研究代表者

磯部　彰（ISOBE　Akira）

東北大学・東北アジア研究センター・名誉教授

研究者番号：90143841

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

なし